

29 広重四世：ノエル・ヌエット

ノエル・ヌエット（本名フレデリック＝アニエス・ヌエット）（1885-1969）は、母親から見せられた歌川広重の浮世絵の影響で、幼い頃から日本に関心を持っていました。しかし、すぐに日本行きを考えたわけではなく、学生時代は詩人を目指して勉強し、何冊かの詩集を発表しました。



Noël NOUËT
ノエル・ヌエット

転機が訪れたのは 1925 年でした。日本大使館から、旧制静岡高校のフランス語教師の職の打診を受け、日本行きを決意しました。静岡の高校でフランス語とフランス文学を教えながら、週に一度、東京にある陸軍士官学校での講義も行いました。三年間の雇用契約が終了した後、パリへ戻ると詩人や作家としての活動を再開しました。1930 年に日本大使館からの依頼で、東京外国語学校（現在の東京外国語大学の前身）のフランス語教師として再び日本に滞在しました。

ヌエットは、講義の合間に東京都内の各地をめぐり歩き、目にする光景を万年筆でスケッチしました。幼い頃に見た広重の浮世絵に着想を受けていたヌエットは、広重が繰り返し描いた江戸の姿を留める場所を探し求めました。ヌエットが描いたスケッチは、雑誌に掲載され、1934 年にはスケッチ集が日本で出版されました。ヌエットは、スケッチ集の中で東京の歴史を紹介し、それぞれのスケッチに解説を付けました。このスケッチ集は大成功を収め、翌年には続編も出版されました。ヌエットのスケッチに感銘を受けた日本の版画商が、それらのスケッチを浮世絵版画シリーズにすることをヌエットに提案し、1937 年に木版を用いた伝統的な手法による手刷りの色版画 24 枚シリーズが出版されました。ヌエットの友人たちは、「広重四世」というあだ名をつけました。

1939 年に第二次世界大戦が勃発すると、フランス人のヌエットは大きな困難が直面しました。フランス語の書物の輸入が禁止されたため、自分でフランス語の教科書を作成しました。また、1945 年初めには、他の在日外国人と同様に、長野県軽井沢に強制疎開させられ、憲兵の監視下で暮らしました。終戦後、ヌエットは東京へ戻り、焦土と化した東京を歩き回り、廃墟となった街を描きました。

その後も、ヌエットはフランス語を教えながら、スケッチや著作を発表していきました。1962 年、ヌエットは約 35 年生活した日本での生活を終え、フランスへ本帰国しました。

1965 年、東京都は、ヌエットに対して外国人として二人目となる東京都名誉都民の称号を贈りました。

掲載日：2023 年 9 月 1 日